

大谷さん「原作の風景に会えた」

実写映画『遙かな町へ』の撮影開始にあわせて20日、主演の大谷亮平さん(44)ら主要キャスト5人が作品の舞台となる倉吉市で会見した。それぞれが原作の雰囲気があるまま残るまち並みへの驚きを語り、その中で演じることができると喜びや意気込みを語った。(井田慎一)

キャストら、まち並み感動

「遙かな町へ」撮影開始

中学時代にタイムスリップし、自身と同年代の父親と向き合う主人公を演じる大谷さんは、作品に触れる前から「両親がその時々でどのような気持ちで生きていたのかを考え出していた」と言い、「原作を読んで心に触れた。作品の中で感じた玉川沿いの風景に出会って、歩けることがうれし

い」と、原作の世界観がそのまま残る倉吉で芝居ができる喜びを語った。昭和ノスタルジーが大好きだという博史の母親を演じる戸田菜穂さん(51)は、倉吉を「すごく美しいまち並み」と表現。「お店の人にもウェルカムな雰囲気だ」と話した。数々のテレビ・映画作品に出演し、名バイプレーヤーと評される滝藤賢一さん



玉川沿いの白壁土蔵群を歩くシーンの撮影で打ち合わせをする錦織監督(左)と48歳の中原博史を演じる大谷さん。20日、倉吉市研屋町周辺

(48)は、前日に白壁土蔵群を聞いたときは跳びはねて歩いたことに触れ、「(作中)の世界がそこにある」と話した。体は中学生だが、心は48歳という難しい役どころについて「14歳のまま生きた役柄は自分の父と同じ。それをヒントに演じたい」と抱負を語った。

中学生の博史役を演じる及川桃利さん(14)は、オーディションに勝ち残るため何回も原作を読み込んだと明かし、「合格の知らせを聞いたときは跳びはねて歩いたことに触れ、(作中)の世界がそこにある」と話した。体は中学生だが、心は48歳という難しい役どころについて「14歳のまま生きた役柄は自分の父と同じ。それをヒントに演じたい」と抱負を語った。

同じくオーディションで中学生時代の博史のマドンナ、智子役を射止めた磯谷萌々子さん(14)は「受かるか不安だった。審査で制服を着たい」と決意した。

始まった市民ら高揚

映画『遙かな町へ』は20日、主要舞台となる倉吉市でロケ現場は祭りのようなにぎわい。「倉吉の誇り」が始まった。制作スタッフが映画化されることに、市民や関係者は大きな期待を膨らませる。撮影は、タイムスリップする前の48歳の中原博史を演じる大谷亮平さん(44)が玉川沿いの白壁土蔵群を歩くワンシーンからスタート。テストや打ち合わせを数回繰り返した後、すべて本番。錦織良成監督の「はい! OK!」の声が現場に響き渡った。



市民が見守る中、昭和ノスタルジーな面影が残るまち並みで撮影準備を進めるスタッフら。20日、倉吉市研屋町周辺

県中部の官民で組織する映画『遙かな町へ』を応援する会事務局を担う倉吉商工会議所の岩本善文専務(68)は、出演俳優の顔ぶれに存在感のある素晴らしいキャスティング。中学生役の2人も原作のキャラクターとぴったり」と高揚感をあらわに。撮影現場の近くで飲食店を営む田栗進さん(49)は「大谷亮平さんを見て、いよいよ始まったと実感が湧いた。映画を通じて倉吉の魅力が国内外に発信されれば」と地域の活性化を期待した。(小谷和之)